

櫻木真乃と種付けおじさん

式宮幽二

R♡18

※本書の、満18歳未満の方の購入、閲覧を禁止します。
保管される際は、18歳未満の方の目に触れないよう、
ご注意ください。

※本書の内容は全てフィクションです。
実在の人物、団体、その他とは一切関係ありません。

※現実とフィクションの区別がつかない方の、
本書の購入や閲覧等を禁止します。

※本書は犯罪を教唆するものではありません。
決して真似しないでください。

※無断で本書を、転載および複製、複製、
WEB上へアップロードすること等を禁止します。

目次

櫻木真乃と種付けおじさん

5

【おまけ】ポテ腹ネーション・スターズ

21

櫻木真乃と種付けおじさん

優れたアイドルの遺伝子を残すべく組織された、倶楽部ブルードル。

WING優勝という快挙をあげた櫻木真乃さくらぎまのにも、いよいよ、その日がやってきた。

種馬となる男も無論、優れた遺伝子を持つていなければならぬ。真乃の相手となるのは、とある大企業の社長である。脂の乗った、恰幅の良い男だ。

真乃はホテルの一室で、スパークルイルミネーションの衣装をまとい——インナーは着ていないため、大きく開かれたジャケットの胸元から豊かな谷間を覗かせて——男を待っていた。やがてシャワーを終えた彼が、ガウン姿で現れると、真乃は改めて頭をさげた。

「ほ、本日は、よろしく、お願いします」

「まあまあ、そう硬くならないで。ね？」

と言われても……。真乃は曖昧な笑みを返した。

男がベッドの縁に腰掛けた。そして隣を、手でポンポンと叩く。

真乃はおずおずと、そこに座った。

「——ほわっ!?」男の手が肩へ回された。

ドキリとして思わず目を伏せる。

(も、もう……!!) もう少し、心の準備が)

予想に反して彼は、それ以上はせず、

「まあ、そうは言っても、緊張するなあってほうが無理な話だよねえ。ねえ、真乃ちゃん？」

「えっと……」

「ほらほら、正直に言っているからさ」

「……はい。デビューのときよりも、緊張、してるかもしれませんが、今なんか、心臓が凄くて」
「そら大変だ！」

男は笑って、真乃の肩をさする。

「でも、大丈夫。おじさんはね、百発百中だから」

「百発百中……ですか？」

その言葉の意味が、すぐにはピンと来ず、真乃は首を傾げた。

「そ！ 排卵剤で強制危険日になったまんこなんか、一晚あれば即孕みだよ」

するりと彼の手が胸元に這入り込んできて、真乃は「ひゃ」と小さな悲鳴を漏らした。

彼は指先で、真乃の乳房をさわさわと撫でる。ごつごつとした手のわりには繊細な手付きだ。

乳頭は意図して避けているようだった。

「実はね、おじさん、めぐるちゃんと灯織ちゃんも担当したんだよ」

彼の指の動きに合わせるように、真乃は小さく身動きしながら訊き返す。

今はまだ、気持ち良いというよりも、くすぐったい感じだった。

「ん……ふ……そ、そうなん、ですか？」

「もちろん、一発でね。親友と同じ種で、孕むんだよ、真乃ちゃん」

「あ……そう、そうなんですわね」

真乃は少しだけ安心した。妊娠なんて、もちろん初めてのことだけど、ふたりと一緒になら、なんだか平気な気がする。

彼は指先から、鼓動が少しだけ落ち着いてきたのを感じ取ったのか。

「本当に仲が良いねえ、イルミネは」

「んっ……ふふ。はい！」

男が胸元から手を抜き、背後へ回った。なにをするつもりかと思えば、衣装のジャケットの襟元を大きく開いて下へとずらす。ぷるんつと真乃の小さ過ぎで大き過ぎない美乳が、まろび出た。咄嗟に腕で隠す真乃。男の手が、優しくそれを解いた。

真乃は顔の火照るのを感じた。吐息も、熱い。

「はあ、はあ、はあ……っ」

男の掌が乳房を下から持ち上げ、ぷるんつ、と揺らす。

ぷるるんつ。同時に揺らされたかと思えば、ぷるぷるんつと交互に胸を弄ばれる。

そしてまた、指先が、今度は人差し指だけが脇の下から、山をすすすす——と登っていく。けれどやはり、それは頂点に立つことはなかった。薄桃色の乳輪をなぞるように歩き回るのみ。

「んっ、ふう……んう……っ」

もどかしい。乳頭が少しずつ熱を帯びていく。

半勃ちほどになったそれを弾きながら、彼は言った。

「真乃ちゃん、はじめて？」

ドキリとした。その胸の弾みが、なによりも答えだった。

もしかしたら怒られるのではないかと、真乃は心配したが、彼は「ふうん」と軽い反応。

「担当プロデューサーくんかな？」

真乃は俯き加減で小さく頷いた。

「悪い男だねえ」

男の指が硬くなった乳頭を摘まみ、こねくり回す。

「んっ、んあ……そ、そんなこと。私のほうから、あっ、あん」

「あはは。本当に仲良しだ。めぐるちゃんも、灯織ちゃんも同じようなこと言ってたよ」

ふたりと彼が関係を持っていることは、薄々だが勘付いてはいた。

だから驚きはなかったし、ふたりとも素敵な子だから、そうなってしまっても仕方がない。

ふと背中に、硬いものが押し当てられた。それがナニかは想像に難くない。いや、でも、と

真乃は戸惑った。アレにしては随分と大きいような気がする。ガウン越しだから、だろうか。

「ゴムは？　ちゃんつけてた？」

「あん……はい。それは、もちろんでっ、す。万が一があったら、いけないからって。んう」

「弁えているね。卵子には限りがあるからね。きみみたいに優秀なアイドルに、凡人が易々と

種付けしちやあいけない。でも、いずれはって思ってるでしょ」

頬を性的な羞恥とは別の朱色に染めて首肯したとき、真乃は、突如として目端に入り込んできた影に、ぎよっとした。それは男のチンポだった。長さも、太さもプロデューサーのものと段違い。どす黒い凶器といった趣。漂う臭いも野性的で、雄の一語が頭をよぎる。

「待ち遠しいねえ、真乃ちゃん。プロデューサーくんとの子作り」

真乃はハッと我に返り、それから目を逸らした。

しかし顔の真横に感じる熱き脈動が、どうしても気になり、チラリチラリ横目を遣わす。

「そ、そう、ですわね」

男のチンポが、ぐいっと頬に押し当てられる。

「ほわ……っ」

「プロデューサーくんとのためにも頑張ろうね。ま、七八人も女の子を産んだら許可されると思うよ」

真乃は思わず、喉をゴクリと鳴らしていた。

「……が、がんばります。むんっ」

手が胸から離れても、その体温はしつとりと張り付いたままだった。

男は再び真乃の隣に腰掛ける。

「それじゃ、始めよっか」

真乃は小さく頷くと、ベッドの縁から床へと座り直した。

男の股間が目の前で雄々しく躍動する。だが実は、それでも完全には勃起していないことを、真乃はこのとき知らなかった。

（ほわああ……やっぱり、おっきい……。プロデューサーさんのよりも……ずっと。これが、めぐるちゃん、灯織ちゃん、ううん、他にもたっくさんのアイドル、きつとアイドル以外の女の子にも、たっくさん赤ちゃんを授けた、おチンチン。私を今夜、孕ませる、おチンチン……♡）
真乃は、それをそっと手に取り、鼻から深く息を吸う。野性的な臭いに頭がくらくらした。内なる雌がきゅん♡と疼く。

まずは亀頭に「ちゅ♡」とキス。プロデューサーにも、したことはなかった。けれど彼には口と口とでしたことがある。逆に今宵、男と口付けをするつもりはない。だって恋人ではないから。彼はあくまで種付け人だ。

「ちゅ♡　ちゅ♡」

亀頭から竿、そして陰囊へとキスの雨を降らす真乃。

特に陰囊は大切な子種の源、盛んにして、濃い雄の臭いを肺いっぱいに取り込んだ。

「ちゅ♡　ちゅちゅ♡　ちゅっ♡　……すう——……はあ——……ああ♡」

真乃はうっとりとした眼差しで男を見上げる。ずっしりと重たい陰囊の片方を持ち上げ、もう一方の手で竿をゆっくり扱いていく。甘い吐息、肉棒をシュッシュッと扱く音だけが耳に聞こ

える。やがて手がニチャニチャしてきた。そのときには、彼のチンポは先ほどよりも反り立っていて、真乃は何度も生唾を飲んだ。舌を突き出して、我慢汁の垂れだす亀頭をれるれる舐める。キスもして、唇を生臭い透明なルージユで染める。手の中で陰囊がぐぐっと、わずかではあるけれど、せり上がりつつあるのがわかった。

すると男も真乃に、ベッドに上がるよう命じた。

真乃は仰向けに寝そべると、足を少しだけ開く。このまま、すぐにでも挿入される心持ちでいたが、違った。男はスカートを捲り上げ、真乃のむちとした太ももを更に大きく開かせると、物欲しそうに疼く秘部へ、顔を埋めた。

「あんっ♡」

彼の舌が割れ目を舐め上げた。

次いで、薄い淫肉を掻き分け、隠された穴の縁をなぞるように舐め回す。

「あっ、ああ♡ んう♡」

太い指が、真乃の陰核を擦った。ピクピクと勃起しかけていたクリトリスは、それで完全に勃起させられた。皮を剥かれ、ぐりぐりと回される。

「んっ♡ ふっ♡ ふう♡ んっあ♡ あっあっ♡ そこ、びんかっ♡ あっあんっあっ♡」

陰茎への愛撫のときから膣奥に溜まっていた愛液が、雪解け水のように、次から次へと流れ出す。雌の臭いが、いっそう強く立ち昇るのが真乃にもわかった。真乃は顔を左右に振って、

喘いだ。

「あっあっ♡ や♡ 恥ずかしいです♡」

男はぢゅるぢゅると真乃のマンコを舐めながら言った。

「プロデューサーくんには、れろれろ、させたことないのかな？」

「んあ♡ あ、ありません。だって恥ずかしい……」

「でも気持ちいいでしょ？」

「んっんっ♡ そ、それは……♡」

返事など、そもそも聞く気はないようで、男は更に激しくクリトリスをこね回した。

「あっあっあっ♡ ああっ♡ あああっ♡ それ、きちゃっ♡ きちゃいます♡ あっあっ♡

あっ、イク♡ クリちゃん気持ちいいの♡ イッちゃう♡ イッちゃう♡ イッあああっ♡」

真乃の腰がガクツと上がった。淫裂がヒクヒク蠢き、蜜がとろとろ零れ落ちる。

そこへ男は指を突っ込み、ぐにぐにと浅いとこを開かせる。

「んっ♡ あっあっ♡」

「おマンコもすっかかり交尾待ちになったね。そろそろいいかな」

ガチガチに勃起したチンポを、秘部へと擦りつける。そうしながら手は真乃の胸へと伸ばし、

乳頭を片やピンピンと弾き、片やコリコリとこねた。

「あんっ♡ はあ♡ ふうっ♡」

「種付けてもらうときには、まずは挨拶をするんだよ、真乃ちゃん。わかるね？」

真乃は絶頂の余韻に浸りつつ太もを抱えて、指でマンコを自ら広げて見せる。

「わっ、私、アイドル櫻木真乃の遺伝子を残すために、貴重な時間を割いていただき、あん♥
ありがとうございます。私も、おっ♥ おじさまの優れた遺伝子を残す役目に携わることが出
来て、とても、嬉しいです♥ あっ♥ 今夜は、私の危険日おマンコを、いっぱい可愛がって、
赤ちゃんを、はっ♥ 孕ませて、ください♥ 今夜の櫻木真乃は、おじさま専用孕み袋です♥
おじさま、早くう♥ おマンコ♥ 早くって疼いちゃってます♥」

「よく出来ました」

と男は言って、真乃の淫穴へと亀頭を押し込んでいく。

「ほら、真乃ちゃん。わかる？ ゴム越しじゃない、粘膜と粘膜の触れ合い」

「はっはっ♥ はあっ♥ はい、熱くて、太いのがあ♥」

「初めてだね、真乃ちゃん。真乃ちゃんの膣に我慢汁を塗り込むのは、おじさんが初めてだね」
「んっあ♥ あっ♥ そう、です♥ 処女膜は、プロデューサーさんに捧げましたけど、処女
膣、生おマンコはあ、おじさまの、おチンチンが最初です♥」

胸の鼓動が高鳴り、初めての雄を求めるかのように、膣がきゅんと締まる。

次の瞬間、それを無理矢理こじ開けて、男のチンポが突き進んできた。

「ほわああっ♥」

さつき間近で見えていたからだろうか。膣でも、その形、熱がありありとわかる。

と同時にプロデューサーのものは、記憶から薄れていく。

彼では立ち入ることの出来なかったところまで、男はもう辿り着いていた。

「はあっ♥ はあっ♥ ふうー♥」

真乃はお腹に手を添え、その奥深くで脈打つものに感じ入った。

ここに、子宮がある。赤ちゃんのための部屋がある。その入り口に彼の亀頭がキスしている。ディープキスのように、ねっとり舐め回される。子宮口もまた、それを追うように吸い付いた。

「はっはあっ♥ あっうう♥ おじさまっ、おじさまあ♥」

甘えるような声を出すと、カリ首が膣壁を削って引いていく。

「うっ、ふううっ♥」

そして——どちゅんっ♥ と最奥を突き上げた。

「おふいつ♥」プロデューサーとのセックスでは出たことのない声。

甘い痺れが子宮から全身へと駆け抜けていく。

考えてみれば当然のことだった。プロデューサーとのそれは、いわば互いを使ったオナニー。けれど、この男とは本当のセックス、交尾なのだ。互いの体と体、性器と性器、精子と卵子が求めあっている。

「ああっ♥ いいっ♥ あっああん♥ あっ♥ くう♥ おじさまっ、すごい♥ 気持ちいい

です♥ おっ♥ あっ♥ ぐりぐり好き♥ あんっ♥ あっ♥
「こうかい？」

男はピストンを辞め、腰を深く挿し込んで小刻みに震わせる。

真乃はコクコク頷いた。

「ふっ♥ うふっ♥ それっ♥ それ好きです♥ あっあっ♥ おチンチンが♥ 卵子だしてっ
て、言ってるみたい♥ 可愛い♥ 気持ち、いい♥ あっ♥ ふう♥ うひ♥ あっはあ♥
あああっ♥」

膣がきゅううんつと締まる。真乃は、このとき初めて膣内でイッた。

チンポでイカされたことで、子宮は精子を求めるようにパクパクと口を開いた。

そこへ、彼の剛直が激しく襲い掛かる。

「あっ♥ ああっ♥ おおっ♥」

男は真乃に押し掛かった状態で、ガツガツと腰を打ち付けた。

「いっ♥ あっあっ♥ はげしい♥ あっ♥ おマンコ、しゅご♥ イキたてマンコすぐイッ
ちゃう♥ あっあああっ♥ おじさまっ、おじさまあ♥ 私、ばっかり♥ あっい♥」

「おじさんもイクからね。真乃ちゃんの処女宮に、こってりザーメンぶちまけてあげるねえ。

まだ誰の精子も知らない綺麗な子宮の隅々まで、おじさんのザーメン、取れないくらいこびり
つかせてあげるからね」

「はいっ♡ はいい♡ おお♡ おじさま♡ おじさまの優秀な精子で♡ 私の卵子を犯して♡
種付け♡ 受精♡ はじめての赤ちゃん♡ 第一子、孕ませてくださいいっ♡」

ピストンがピタツと止まり——すぐさま、これまで以上の激しさで再開される。

「んいっ♡ またイッてますううう♡」

膈内でチンポが雄々しく膨らむ。金玉がぎゅんぎゅんとせり上がっていく。

誰よりも深く彼と繋がった真乃には、その全てが感じられた。

「あっあっ♡ きてっ、きてください♡ ザーメン♡ あっいっ♡ ふっふっふううっ♡

うっ♡ ほっ♡ おほ♡ ぜったい、卵子でてます♡ 排卵剤なんて、なくなっ♡ おじさ

まの、おチンポでガンガン♡ 赤ちゃんの部屋、ノックされたら♡ おっお♡ ぜったい卵子

でる♡ いつでもっ危険日おマンコに、なっ♡ なっ♡ 百発う百中♡ おじさま

ザーメン欲しがって、卵子のほうからあ♡ お出迎えしちゃ——あっ♡ いっきいいいっ♡」

真乃は歯を食いしばり、押し掛かる男を突き飛ばしかねない勢いで腰を弾ませる。

それに対して男は敗けじと抑えつけるかの如くにチンポを打ち付けた。

龟头と子宮口が深く深くキスをすると同時に、男が射精する。

——どっぴゅどびゅどびゅるるるっ！

「いっひいっ♡ おお♡ きたっ、精子っ♡ きてます♡ おチンチンが、どくどく

いってるの、わかります♡ 私の子宮も、きゅんきゅんっ♡ 子作り喜んでます♡」

「おおっふう。本当だねえ。チンポに吸いついてきてるよお」

真乃の子宮は産まれて初めて受け入れる、雄の奔流に震えていた。

大きな絶頂の稲妻が全身を突き抜けた後も、小さな痺れは絶えることがなかった。

「はっ♥ あひ♥ ほわあ♥ すごい、精子、熱い♥ どろどろ♥ はあっ♥ あは♥」

焦点の合わない目が、突如、見開かれる。

「あえ♥ な、なんで」

また彼が動き出したのだ。一度、射精してにもかかわらず、膣内のそれは依然変わりのない硬さを保っているようだった。プロデューサーは、そんなことはなかった。仮に二回戦をやるとしても休憩が必要だった。

「真乃ちゃん、言ったじゃないか。必ず孕ませてあげるって。今夜中に、ね。子宮のほうも、ほら、もっと徹底的に中古子宮になってから孕みたいって。一生、おじさんのザーメンが張りついたままになるくらい犯してあげようねえ」

「あっあっ♥ そんなこと、い♥ 言わないで♥ お願い、んっ♥ します、ちょっと休憩♥んっあっ♥」

「気を遣わなくていいよ。おじさんは、ほら、まだまだ元気だから」

「んっあっ♥ そうじゃなっ♥ あっお♥ あっ♥ 精子、押し込まれてる♥ あっいっ♥ あっふっ♥ あっあっ♥ いっ♥ きもちい♥ おじさま、きもちいい♥」

絶頂の余韻を楽しむかのような、ゆるやかなピストン。そうだったのは最初の短いうちで、真乃が無意識にチンポに媚びて腰を振るようになる、男もそれに応えた。

「あっおっ♡ おおおっ♡ はっ♡ あひっ♡ あえっ♡ んいっ♡ あっあっあっ♡ あっ♡
 ♡ ああ♡ ああ♡ イク♡ イクイク♡ イクイク♡ おマンコ♡ ガン突きさ
 れて♡ 交尾アクメする♡ あっ♡ イク♡ おじさま、おねがいます♡ 子宮に、おチ
 ンポでキスして♡ ♡ ぐりぐりちゅーで、精子ください♡ あっ、それっ♡ ぐりぐりっ
 ちゅーっ♡ むぢゅっううっ♡ うっうっ♡ イクうううっ♡」

足をピンと伸ばしてイッた真乃を、男はひっくり返した。

丸い尻を持ち上げ、雌穴にチンポをハメるや否や、ガツガツ突き立てる。

「おっ♡ おっ♡ おっ♡」

真乃のタレ目がちな目元は更に垂れ下がり、半開きの口元からは涎が垂れる。

アイドルの姿は、そこにはない。にやけた顔を浮かべて、ただ雄の思うがままの孕み袋。遺伝子を残すという本能に取り憑かれた雌の姿だけがあった。

「おほっ♡ ひっひっ♡ ああ♡ あっ♡ あっあっ♡ 乳首こりこり♡ それすぐイク♡ お
 んっ♡ またイク♡ おひっ♡ あっあっ♡ イクの、とまんやい♡ お腹、精子
 が、たぶたぶしてます♡ 卵子ザーメン漬けになっちゃう♡ きもちいい♡ あっあっ♡
 こんな、全部、初めて♡」

「これから、たっくさん赤ちゃんを産もうね。おじさんの他にも、真乃ちゃんと子作りしたいのは、大勢いるからね」

「ほわっ♡ はいっ♡ おっ♡ 嬉しいですよ♡ いっぱい種付けしてもらいます♡ おじさまも、また種付けしてください♡ 妊娠♡ 受精♡ きもちいいの♡ もっと、いっぱい♡」

「もちろんだよ。ポテ腹の真乃ちゃんも、犯してあげるね。だから孕めッ、孕めッ、孕めッ！」
 「はっ♡ あっ♡ たのしみ、です♡ あっおっ♡ ガン突き♡ ほっ♡ おほっおっ♡ おおっ♡ 赤ちゃんのお部屋、こじあけられる♡ あっああっ♡ またイクっ♡ イクっ♡ わんおじさまっ♡ おじさまあっ♡ あっ——あああああっ♡♡♡」

真乃は膣を締め上げ、潮を噴き出し絶叫した。

男は尿道の一滴までもを、彼女の最奥に吐き出し、ようやく、挿入から初めて抜いた。

おマンコから、どろりと白濁した汁が零れ落ちる。

それを見下ろし、なおも勃起をしている種付けチンポは、ビクンッと跳ねた。

ふたりの夜は、まだ、明けるときを知らない。

ボテ腹ネーション・スターズ

ベッドに腰掛ける全裸の男。その股座に真乃は正座して、チンポを頭に乘せていた。彼女のお腹は、すっかり膨らんだものだ。胸も一回りほど大きくなったし、乳輪は色濃く、乳首なんて指ほどに太くなった。

へその横には、棒人形のような小さな入墨が四体。暗号などではない。彼女が、これまでに産んだ子の数を表している。頭が白丸のものが三つ、黒丸が一つ。つまり女兒を三人、男児を二人、産んだ。男の種なのは第一子で、今、腹にあるので二人目だった。

男の左肩にはボテ腹の灯織が、右肩にはめぐるが、しな垂れ掛かっている。それぞれ、三子、四子、産んでいる。そしてやはり、ふたりも、今、孕んでいる子は男の種だった。

四人の視線は、真正面のカメラに向けられていた。

パシャリ——余興が済むと、めぐるが猫なで声で「パパあ♥」とキスをせがむ。

「あっ」と灯織はむくれ顔して首筋へとキスをしていく。

そうしながら、ふたりの手は男の下半身へ伸ばされた。

男も、お返しとばかりに、ふたりの尻を撫でる。

やや出遅れた形の真乃。しかし、地の利があった。

ふたりが竿や亀頭を愛撫するなら自分は、と重量感ある金玉にキス。舌を這わせる。

「はえ、れろれろ♥ 久しぶりの、パパのデカ金玉♥ ちゅぱ♥ ちゅうっ♥ れろれろ

♥ お腹の子を孕ませてくれた、ザーメン工場♥ れろっちゅ♥ ちゅっれる♥ 安定期にな

るのが待ち遠しかったです♥ 最初の子は男の子だったから、ボテハメしてくれませんかでしたし……」

男は「すまんすまん」と、にやけ顔で謝った。

「また孕ませてやるから。それで許してくれよ」

「んふふ♥ れろ♥ ちゅぱっ♥ れろろろろろっ♥
めぐるが言った。

「パーパ、わたしはー？」

「もちろん、めぐるちゃんもだ」

「やったー！ パパとの交尾が一番、気持ちいいんだー！」

男は灯織にキスをして、

「灯織ちゃんは、もうやめると聞いたけど」

「えー!? なんで？ 灯織っ」

彼女は少し悩んだような顔で答えた。

「そろそろ、プロデューサーさんのを産んであげようかなって」

真乃は金玉から口を放し、首を傾げる。

「まだ産みたいの？ 灯織ちゃん」

同調するめぐる。

「一生に産める数は限られてるんだし、ねえ？」

「それは、そうだけど……可哀想じゃない」

「前にもそう言って妊娠したよね。でも出来なかったんだし、よわよわ精子なんだよ！」

「うん、私もそう思う。危険日まんこに一発も当てられないなんて。だからこそ、誰かが一人くらいは産んであげないと……」

「無理にすることないよー！ ね？ 灯織。また、おじさまたちに種付けしてもらおうよー！
そうだ！ 今度は三人一緒に種付けてもらおう？ 真乃も、したいよね？」

「うん。だけど、灯織ちゃんが本当に、プロデューサーさんなんかのを孕みたいなら……」

男が灯織にキスをした。その片方の手では、めぐるの大きく張った胸を揉み、もう一方の手では真乃の頭を撫でる。

「まあ、まあ、三人とも。話を振ったのはおじさんだけど、その辺にしとこうよ。灯織ちゃん、きみの好きなようになさい。ね？」

「……はい、ありがとうございます」

男はベッドから降りると、そそり立つチンポを揺らして三人を手招きした。彼女たちは男に言われるがまま、自ら乳首をシコシコ扱いて、母乳をピュピュッとチンポに降りかけた。ローション代わりだ。右からは灯織、左からはめぐる、そして正面からは真乃が、その小さな命を宿した大きな腹で、勃起チンポを挟みこむ。

めぐるが、我が子に向かって愛おしそうに語りかけた。

「わかりまちゅかー？ パパのチンポでちゅよー」

「ほわっ……いま、動いた」

「こっちも。わかるのかな」

男はチンポから伝わる胎動に、答えるかのようにビクンビクンッと躍動させた。

真乃たちは微笑みを零すと、少しづつチンポを擦り始める。おっぱいのように柔らかいわけではないものの、己が孕ませた雌が、その腹でもって奉仕する様は、普通には味わえない趣がある。

「んっ、パパチンポ、ふっ、ガツチガチだー♥」

「はぁ、むんっ、チンポで、娘の成長を感じるなんて♥」

「んっんっ、まったく……変態チンポなんですから♥」

男は左右のめぐると灯織の尻を鷲掴んだ。

「あんっ♥ もぉー、パパあ♥」

「きゃっ♥ きゅ、急に脅かせないでください！」

軽薄に謝りながら、

「おじさんばかり気持ち良くなっちゃ悪いと思ってね。真乃ちゃんのほうは、手が足りないし、めぐるちゃんたちが、おじさんの真似して揉んでやりなさい」

二人は頷き、真乃のやわこい尻に手を伸ばした。彼の手の動きを真似して、左右の尻たぶを揉みしだく。真乃は当初、自分だけ彼の愛撫を受けられないことに少しの寂しさを感じたが、ふたりの親友が、見事、彼のねちっこい手付きを投影してくれた。手の大きさや感触こそ女のものだが、二人分の模倣——親友の心遣いに尻が熱くなる。

三人の尻が、しっとり汗ばんできた頃、男は軽く前後に腰を動かし始めた。

「あっ♡ パパチンポ、我慢できなくなってきたみたいだねー♡」

「いいよ、射精してください♡ んっ♡」

「イルミネのボテ腹サンド♡ 赤ちゃん感じながら射精♡」

男の手が、めぐると灯織の尻を、ぎゅううううと握りつぶさんばかりにする。と同時に彼は短い唸り声をあげ、チンポから濃厚な子種を吐き出した。正面にいた真乃の孕み腹がべっとり、白く染め上げられる。めぐるは、その腹に舌を這わせ、灯織は硬いままのチンポを啜え込んだ。

「真乃、きれいきれいしたげるね。れるれる♡ れるんぺろ♡ れるれるれる♡」

「んっ♡ めぐるちゃ、あっ♡ おまんこは弄らなくていいっ、から♡」

「パパチンポ♡ お疲れさまです。残り汁いただきますね♡ ちゅ、ちゅっ♡ ぢゆるっ♡」

「おおお……気持ちいいよ、灯織ちゃん」

彼女の舌でピカピカに磨かれたチンポを振りながら、男はベッドに妊婦アイドルを並べる。

さて、最初は誰から挿入してやろうか。天の神様の言う通り、なんて口ずさめば、彼女たちは

期待の目でチンポを追って生唾ゴクリ。ここで我先にと媚びを売らないのは、流石はイルミネ、仲が良い。尊くて金玉がぐつぐつ滾る。

めぐるが口を開いた。

「パパあ♥ 灯織から挿入いれてあげて？」

「えっ」と驚く本人。

「だって、すっごく期待した顔してる♥」

「そんなの、めぐるだって」

残る彼女の意見はと言うと、

「灯織ちゃん。私たちは、もう少し我慢できるから、先にしてもらって？」

「ま、真乃まで」

二対一だね、と男は言って灯織の真っ直ぐな足を丁寧に開かせる。

かつては薄かった淫肉も、多くの男に抱かれた今、分厚くなり、期待からすでに、しとどに濡れそぼって卑猥な雌の匂いを立ち昇らせている。亀頭をあてがい、入り口をくちゆくちゆと音を立ててやれば、灯織のほうも黙って、潤んだ瞳で男の顔を見る。

「きよ、今日のはじめてチンポ、ください……♥」

男は頷き、ゆっくりと腰を押し進めていった。

「はっ、ああ……♥ ん♥ 赤ちゃんの通り道、あん♥ 広げてくる♥ ああ……♥ 赤ちゃ

んのお部屋、きました♥ ふふ♥ パパチンポですよ♥ あなたを孕ませてくれた、パパチンポ……♥ お迎えにきてくれましたよ♥」

お腹に負担をかけないように、覆いかぶさるようなことはしない。

ピストンもしない。男は撫でるように、子宮口を刺激する。

「んっ、はあ……あん♥ いいこ、いいこ、気持ちいいです♥ でも、赤ちゃんと私、どっちに？」

「もちろん、両方だよ。そら、いいこいいこ」

「あっ♥ んっ♥ ああ♥ 赤ちゃんも、きつと喜んで♥ あっ♥ はあっ♥」

物欲しそうに、めぐると真乃がすり寄ってきた。

甘えん坊なママだと、おマンコを手で撫でてやる。

「あん♥ パパ♥ パパあ♥」

「んっ♥ ふっ♥ ああ♥」

灯織の様子を見るにもう少し刺激を与えてやってもいいかもしれない。

男は、腰を小刻みに震わせる。

「んっ♥ んっ♥ あっ♥ ブルブル、いい♥ 子宮に響いてっ♥ あっ♥ ああ

ん♥ あっ♥ う、うそ♥ もうイキそ♥ あっ♥ ど、どうしよう♥ この子に、あっ

んっ♥ 変態ママだって思われちゃう、かも♥ こんな早くイッたら♥」

「大丈夫大丈夫。パパとママが、それだけ仲良しってこと。喜ぶよ」

「あん♥ そ、そうですよね♥ んっあっ♥ ママのイクとこ、感じてね♥ あっあっ♥ あんっ、パパっ♥ パパっ♥ パパチンポ♥ 大好きです♥ あっあっ♥ んっ——あああっ♥」

灯織が体を震わせ、膣を締め付ける。

しかし、男はまだ射精に至っていない。そのまま抜かずに同じ動きを続ける。

灯織が軽い絶頂を繰り返して、雌穴をうねらせるのが心地よかった。

男はめぐるの胸に吸いついた。

甘噛みしてやれば「んはっ♥」ピュッと勢いよく母乳が噴き出す。

ちゅばちゅば、ちゅうちゅ。さらりとした喉越し。甘い香りが鼻を抜けていく。

「あっ、んう♥ パパ、赤ちゃんみたいだよー♥ んっ♥ あは♥ かわいい♥」

真乃のほうも、と思って口を放すのと、彼女が手マンから離れるのとは同時だった。

妬いたのだろうか。いや、そうではない。真乃は男の後ろに回ると、仰向けに股の下へ頭を

突っ込み、陰囊をぺろぺろと舐め始めたのだ。激しいピストンをしていない、今だからこそその

奉仕。男はにわかに射精感が込み上げてくるようだった。

めぐるの母乳を吸い、真乃に金玉を舐めさせ、灯織の淫肉を楽しむ。

それぞれが奏でる卑猥な音も、よく昂らせてくれる。

竿がぐぐぐと膨らむと、灯織も悟ったようだ。

「あっあっ♥ 射精しそうですね♥ いつでも、あっあっ♥ きて♥ きてください♥
ママミルクより先に、んっ♥ あっああっ♥ パパのチンポミルクを、この子に♥ 飲ませて
あげてください♥ きっとな、大好きになりますから♥ 私たちと、あっ♥ 同じように♥」

男の陰囊が震えた。

「くうっ！ 射精るぞ！」

ビュルッビュルルルルッ！

灯織も、また絶頂した。

「んっ、んう~~~~~っ♥ ……はあっ♥ はあっ♥ パパのチンポミルク♥ おいしいっ
て、言ってるみたい……♥」

男は彼女の中から己を引き抜くと、今度は真乃に狙いを定めた。

少しむくれた顔のめぐるに、灯織は言った。

「……ねえ」

「なーに？ 灯織」

「さっきの話、なんだけど……。三人で、っていうの、その、いいかなって思って」

めぐるは、にんまり笑う。

「ね、いいよねー♥」

「うん。……プロデューサーには、ちょっとだけ申し訳ないけど、でも」

「優秀な遺伝子、残さなきゃだもん」

二人は頷き、お互いのお腹を撫で合う。

そして、喘ぐもう一人の親友のもとへ、向かうのだった。

「パーパっ♥ 今度は、わたしが金玉ペろペろしてあげるねー♥」

「あの、私のミルクも……♥」

「んっ♥ ほあ♥ あっ♥ たくさんの人を孕ませてきた、優秀なチンポ♥ そんなパパの娘

なんだって♥ 今のうちから、あっあっ♥ チンポ教育♥ 舐てください♥ あっあっ♥ あ

あっ♥」

(了)

櫻木真乃と種付けおじさん

2021年 7月 1日 初版

作 者 式宮幽二
Twitter @yu2nomiya

発 行 式二文庫
URL <https://yu2nomiya.fanbox.cc/>

データ制作 文庫本作成データ生成ツール・威沙
URL <http://tokimi.sylphid.jp/>

※無断転載・複写・複製・アップロード禁止。